新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る
平成 29 年度　業務報告書

1.　入館状況について

平成 29 年度総入館者数　526,371 人（対前年度比　100.3%）

［総括］

リニューアルオープンから 5 年が経過し、指定管理者として 2 年間の指定管理期間のうち 1 年目の管理運営を行った。充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様サービスを第一に努めた。

水族館のような集客施設での入館者数は、リニューアルオープン後、減少傾向を辿ることが一般的であるが、当館では平成 29 年度 526,371 人のお客様にお越しいただき、対前年度比 100.3%と減少することなく維持することができた。入館者数を月別でみると、4・6 月はほぼ昨年並みを維持できた。5 月はゴールデンウィーク期間中の天候が良好であり、5 月 3 日（水・祝）～6 日（土）の 4 日間は全て 5,000 人を超え、結果的に対前年度比 108・6%と上回った。7 月は上越市立水族博物館のリニューアル工事に伴い 5 月から休館していたことで観光客が新潟市周辺に向けられたと思われ、対前年度比 106.9%となった。最も多客となる 8 月は、海の日と週末とお盆が連休になったことにより、対前年度比 104.1%と繁忙期 2 ヶ月連続で昨年を上回った。9 月は 23 日「秋分の日」が土曜日と重なったこともあり、昨年と比べ土曜日を含めた休日が 1 日少なかった影響で対前年度比 85.6%、約 7,000 人少なく大きく下回った。10 月の行楽シーズンでは、天候にも恵まれ一般のお客様の来館が増えたこと、11 月は「文化の日」の祝日が週末と連なり 3 連休になったことなどで昨年を上回り、9 月の減少を取り戻す形となった。12 月は 11 月とは逆に、昨年あった 3 連休が無かった影響で対前年度比 86.9%と再び大きく下回る月となった。1 月上旬は、寺泊沖で水揚げされた「ノコギリザメ」を生体展示し、話題性から多くの方に来館していただいたが、中旬以降全国的に気温が低く、日本海側では降雪が多かった。新潟市内も例外ではなく、1 月 12 日（金）には、中央区では平年の 11 倍以上となる 80cm の積雪となるなど、8 年ぶりの記録的な降雪となった。降雪は一時的であったため、対前年度比 95.4%と大きな影響はなかったが、2 月に入ってからは積雪に加え記録的な寒波が襲来し、多くの方が外出を控えた影響で対前年度比 79.3%となり、閑散期の 2 月で昨年より約 5,000 人減少した。3 月は昨年と同人数であった。昨年度に引き続き冬場の集客対策として、年間パスポート購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」や成人の日企画「新成人及びその同行者の入館料免除」、「クリスマス」「正月」でプレゼントを配布するなどのイベントを実施し、閑散期の実施であったが、話題性により僅かながらの入館者増が図れた。

11 月終了時点で対前年度比 102.8%と順調に推移していたが、冬季の大雪・寒波の影響により昨年を下回ったが、最終的には対前年度比 100.3%と昨年並みを維持することができた。冒頭申し上げた集客施設がリニューアルオープン後、減少傾向を辿ることが一般的な中で、昨年度を僅かながら上回り、5 年続けて 500,000 人を維持できたことは、一定の水準を達成できたと考えている。入館者数は、「休みの連なり方」や天候により左右されるが、今後も展示や企画内容・実施時期などに工夫を凝らすことで、入館者数の増加及び平準化に努めていきたい。

パスポート購入者は、過去最多の購入者であった昨年度の 12,456 人から 14,011 人とさらに 1,555 人増加し、最多購入者数を更新した。11 月に条例の施行規則改正を行い、有効期限を購入日から 1 年間を

最初に入館した日から 1 年間に改正した。これにより家族や友人へのプレゼント用などとして幅広く利用することが可能となった。また、昨年に引き続き、積極的に年間パスポートの宣伝を行ったことや、購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」、館内出口付近に当日の入館券に追加料金をプラスすることで年間パスポートに切替ができるというポスター掲示やチラシの設置を継続して行ったことで、より多くのお客様から年間パスポートへの切替をしていただいた。パスポート所持者の平均年間来館回数が 1 人あたり 5.5 回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等手帳（対前年度比 101.6%）」「老人施設（対前年度比 97.2%）」「小・中学校（対前年度比 96.0%）」「保育園・幼稚園等（対前年度比 94.9%）」と増減はあるものの、減免利用者総入館者数は、25,515 人と総入館者に占める減免利用者の割合は 4.8%となっており、当館の果たすべき社会的役割はますます大きくなっていると考えている。

毎月実施しているアンケート調査では、展示生物に対する満足度が 94%以上を確保しており、「色々な魚がいて面白かった」「子どもがとても喜んでいました」「実際に触れるものがありよかった」「今まで多くの水族館に行ったけど、ここまで勉強になったところはなかった」「館内とてもきれい。演出も素敵でした」「展示が分かりやすかった」などの感想が寄せられている。また、「子どもの遊ぶスペースもあり、所々にイスもありのんびりゆっくり見ることができるところが気にいってます」「館内もとてもきれいで楽しく過ごせました」「休憩スペースが多くてよかった」と展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。

今後も、常におもてなしの心を持ち「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

（１） 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

［総括］

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

例年行っている繁忙期における開館時間の繰り上げ・延長は、行った日すべて年間平均入館者数を超えており、市民サービスの提供という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

まず、ゴールデンウィークは 5 月 3 日～5 日について開館時間の 30 分繰り上げを実施した。曜日の並びにより 3 日間の実施であったが、県外及び帰省による入館者が増加し、水族館へのアクセス道路が大変混雑するため、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であった。

次に海の日とその前日である 7 月 16 日と 17 日について開館時間の 30 分繰り上げを実施した。さらに 8 月 11 日～15 日のお盆時期について、開館時間の 30 分繰り上げ及び閉館時間の 1 時間繰り延べを実施した。昨年から 8 月 11 日に国民の祝日「山の日」が施行され、平成 29 年度は週末と盆休みとも連なり長期間の休みとなった。入館者数も平準化されたのではないかと思われる。例年のお客様の入館動向を把握し、適切な開館時間の繰り上げ・延長を実施し市民サービスのため目的を十分達成した。

例年１月２日・３日は、市民サービスのため臨時開館を実施している。みなとトンネルからの人の流れも多く、マリンピア日本海の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から込み合う。初詣客の入館促進を図り、正月開館も定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第 42 条に基づく電気設備法定点検を 3 月 1 日・2 日で実施した。従来からの休館日は「12

月 29 日から1月1日」と「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のため 3 月の第 1 木曜日とその翌日」しかなく、今後も工事スケジュールを組むことが困難となる場合がある。

今後も開館時間の変更については、お客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービスに努めていくことが必要である。

（２） 展示生物について

［総括］

協定書の仕様書に謳われている約 500 種、20,000 点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

生物交換や採集等で昨年度導入した魚類輸送専用車両を計画的に運用し、展示コンセプトに沿った沿岸性魚類や深海性魚類、温帯・亜熱帯性魚類等を搬入した。

飼育困難魚への飼育展示にも積極的に取り組んだ。他園館の協力を受けて、日本海大水槽で 3 年ぶりとなるアカシュモクザメの展示を再開することができた。新潟県内各地の漁業協同組合の協力により、特に深海性生物の収集、展示に努めた。アバチャン、トクビレ、ガンコ、ナガヅカ等の魚類の他、両津湾産サラサベッコウタマガイの展示を 7 年ぶりに実現した。ノコギリザメの展示は 6 年ぶりで、1 月 2 日の新年開館から現在まで展示継続中である。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。世界初の成功例となったアカムツ（通称＝ノドグロ）の人工育成個体を「#18」水槽で継続展示し、飼育下では前例のない 700 個体におよぶ成魚の群れ展示を実現した。ホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノメダカ、ニホンイトヨを「信濃川水槽」に、クロベンケイガニ、アカテガニ、シロボシアカモエビ、アカシマモエビ、アカハライモリ、シナイモツゴ、トミヨ属淡水型（イバラトミヨ）を「育成室」に展示した。「にいがたフィールド」で「にいがたフィールドガイド」を冬期を除く月 1 回実施し、季節ごとの観察ポイントや自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカ、トミヨ属淡水型（イバラトミヨ）などの紹介を行なった。

パスポート利用者を意識し、季節感のある展示更新を心掛け、1～2 ヶ月で内容を更新する特別展示を行った。サケ、カワヤツメ、サドガエル、ハクバサンショウウオ等、季節だけでなく、地域を特徴づける生物を積極的に導入した。

昨年製作したリュウグウノツカイに加え、クサビフグ、アカナマダ、ヤリマンボウの剥製標本も製作し、常設展示した。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

（３） 通年事業の実施状況について

［総括］

① ペンギン解説

ペンギン散歩道（夏期はペンギン海岸）でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。実施場所は屋外観覧導線に面しており、およそ 15 分の解説時間の中で気軽に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことに目的をおいている。

「イルカショー」では、ハンドウイルカ 2～3 頭、カマイルカ 1～2 頭を交代で用いて 1 日に 4～5 回、1 回約 20 分のイルカショーを行った。イルカの認知、行動能力などを解説し、楽しく学べるイルカショーを心がけた。多客期には 1 日の実施回数を増加し、より多くの来館者が快適にショーを楽しんでもらえるよう配慮した。毎回のイルカショー後には、イルカに関する疑問が解消できるよう質問受付を実施した。毎月実施しているアンケート調査では、概ね高評価を頂いている。

③ マリンサファリ給餌解説

主にオスのトドを用いて 1 日 2 回、およそ 10 分間の解説を実施した。体重1トン近い大型のオスを直接コントロールして飛び込みなどをさせる園館は他にほとんどなく、来館者から大変好評を得ている。

④ ひれあし類解説

午前のマリンサファリ給餌解説終了後、サファリ内でゴマフアザラシとカリフォルニアアシカに餌を与えながら解説した。アザラシ科とアシカ科の違いなど、トドの解説だけでは説明しきれない鰭脚類全般についての解説を行っている。

⑤ 日本海大水槽解説

水生生物や海洋環境に関する知識の普及を目的に、日本海大水槽前で飼育員が解説を行った。参加者は大水槽前のベンチに腰掛けてゆったりと解説を聞くことができる。展示生物の紹介から水族館のしくみまで多角的な情報を伝えられた。

⑥ 磯の生き物解説

磯の体験水槽で、生物を 1 日 1 回、解説を交えながら近くで観察してもらう。生物の扱い方や、生息環境への理解を深めるのに有効であると実感している。

⑦ アクアラボ体験

アクアラボで水生生物に対する知識と理解を深めることを目的に、顕微鏡・カメラ・大型液晶モニターを用いて、観察や解説を行った。参加者の年齢に合わせて季節感を考慮した日替わりのテーマに沿って実施し、たいへん好評であった。

（４） 生物展示関係イベント等の実施状況について

［総括］

① 特別展示「新潟の淡水カメ」

新潟県内に生息する淡水カメ 4 種、ニホンスッポン、ニホンイシガメ、クサガメ、ミシシッピアカミミガメの生体を展示し、カミツキガメ（特定外来生物）等は捕獲情報等をパネル展示して、県内の淡水カメの現状を紹介した。

当館でカメ目および爬虫綱の特別展示は初めてであったが、ミシシッピアカミミガメを始めとする国外外来種の生態系への悪影響や、ニホンイシガメなどの在来種の減少に対する関心が高まっていた時期に開催できた。

県内の淡水カメの現状を紹介し、身近な水辺の生態系や環境多様性の大切さについても考える良い機会となった。

② 特別展示「新潟市水族館 50 年の歩み」

新潟市立新潟水族館が開館して今年で 50 年となる。これを機に、50 年間の出来事や展示生物や施設の変化、生物保護への取組等を紹介し、長年新潟市にある水族館としての役割等を紹介した。前期、後期に分けて実施し、展示パネルや資料などを更新することで、より多くの情報を発信できた。また、関連イベント等も行なった。

今までの水族館だけでなく、現在や将来の水族館の役割や重要性について理解を深めてもらう良い機会となった。

③ 特別展示「ノコギリザメ」

寺泊漁業協同組合の協力で、6 年ぶりとなるノコギリザメの展示を行なった。当初、平成 30 年 1 月 2 日の新年開館から一週間の期間限定として公開したが、個体の状態が良好で、現在も展示継続中である。普段あまり目にすることのない本種の生体展示は、実物を間近で観察できる良い機会となった。

④ 特別展示「深海には何がある？水中探査機で見た日本海」

アカムツ生態調査の一環としてふくしま海洋科学館と共同で調査を実施し、水中探査機で撮影した日本海の深海底の地形や生物を映像やパネルを用いて紹介した。調査で得られた情報を広く公開することで、普段見ることができない海底の地形や生物を知る機会をつくり、海洋環境への理解を広めることができた。

⑤ いきもの教室

4 月から 3 月まで、全 13 回のプログラムを計画し実施した。13 回は全て違うプログラムとし、対象年齢を小学生以上に設定した(7 月、2 月、3 月は小学 4 年生以上)。全 13 回の応募数は定員に対して 189.6%で、昨年度の 332.9%に比べて少なかった。応募者が多かったのは、6 月の「調べてみようイルカのあれこれ」535.0%、7 月の「貝の標本づくり」565.0%であった。一方で 9 月、11 月、12 月、3 月は定員割れをした。定員割れをしたプログラムは、例えば「かたちのふしぎ」など、タイトルで何をするのかが明確で無かったことも一因と考えている。募集の告知は「市報にいがた」「当館ホームページ」などで行っているが、応募が少ない場合には、館内での募集、Facebook や LINE@などの SNS を活用して告知するようにした。アンケート結果を見ると、93.6%の方が「とてもおもしろかった」「おもしろかった」と回答し、参加者の満足度は高かった。

⑥ にいがたフィールドガイド

にいがたフィールド(以下、フィールド)紹介と、そこで見られる動植物を解説するプログラムで、環境教育の機会とすることを目的に行った。入館者を対象に月 1 回約 15 分間のガイドとし、4 月から 11 月と 3 月の計 9 日間実施した。累計参加者は 58 名であった。夏期では、暑さによる参加者の体調を気遣い，日傘を準備した。フィールドで見られる動植物の変化等を当館ホームページ、館内設置のモニターやガイドブックで情報発信しているが、当日に見られた動植物について職員が解説することで、フィールドの魅力をより知ってもらい、身近な水辺環境への関心を持ってもらう機会になったと考える。また、猛暑や雨天でも参加があったことから、入館者の期待にも応えるプログラムであったと感じた。

⑦ 世界カワウソの日イベント

5 月の最終水曜日が International Otter Survival Fund により「World Otter Day」と定められていることから、ユーラシアカワウソを飼育する国内 9 園館と歩調を合わせる形で実施した。

絶滅した二ホンカワウソの基亜種であるユーラシアカワウソの生態や生息環境、それを取り巻く諸問題を知ることで、環境意識の醸成につながることを目的に、アクアラボ内でハンズオングッズ等を用いて行った。新潟市内にもカワウソの痕跡が地名として残っていることを紹介した資料には近隣からの来館者の多くが興味深く見入っていて、関心の高さがうかがえた。

⑧ 田んぼ体験

リニューアルで造成した田んぼで田植えから稲刈り、脱穀までの稲作の体験と収穫したワラを使ったワラ細工体験をおこなった。5 回目の実施となる。当館の事前募集プログラムとしては唯一の4歳以上という幼児も対象にしたプログラムであることから幼児を含む親子の応募が多かった。応募数は定員 12 組のところ 50 組の応募があった。

田植え、稲刈り、稲架がけ、脱穀、ワラ細工と稲作の一連の流れを体験でき、また、そこにいる生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境教育としても十分機能していると考えられる。

⑨ フォトコンテスト受賞作品展

応募期間：7 月 1 日～10 月 29 日（応募点数 340 点）

展示期間：12 月 15 日～2 月 4 日（展示点数 141 点）

今回が 4 回目の開催。募集期間を初夏から秋にかけてのオンシーズンとし、入賞作品の展示を冬期のオフシーズンにすることで、長期間に渡っての話題づくりとなることを想定して実施した。応募点数も昨年度より増え 340 点（昨年度 291 点）であり、本企画が定着してきたと考えられる。

⑩ 育成室開放

生物育成の成果は本館地下の育成室にて通年紹介している。通常は室外から室内を見学することを目的とした部屋だが、育成の現場をより間近に感じられる新しい試みとして、室内を開放するプログラムを行った。1 日 1 回 30 分間、複数の職員がいる状態で、室内を自由に見学できる時間を設けた。今年度育成した生物や稚魚などに与えるエサについて、職員は会話形式で解説した。4 日間の累計見学者数は 130 人であり、混雑のあまり部屋への立ち入りが難しい日もあるなど、育成現場への関心の高さが伺われた。

⑪ イルカバックヤードミニガイド

夏休みのイベントとして、当日に参加者を募集してイルカのガイドを 30 分程度行った。10 日間開催し、参加者はのべ 124 人であった。少人数を対象にしたガイド形式のプログラムで、参加者の反応を見ながら話を進めたり、質問に即応したりと、参加者の理解度に合わせてイルカについての情報を提供できるため、満足度も高かったのではないかと思われた。

⑫ ナイトツアー

9 月に1回 20 名の定員で合計 4 日実施した。参加者は計 84 名とほぼ例年どおりであった。参加費が大人 2,000 円、小人 1,000 円と、当館のイベントの中では高額な部類に入る企画であるにもかかわらず、ナイトツアーの人気は高い。通常観ることのできない閉館後の夜の水槽の様子を観察してもらい、昼と夜での生き物の活動の違いや外観の変化等をツアーガイド形式で解説し、水生生物の生態や自然環境への関心を深めてもらった。完成されたプログラムとして継続を考える。

⑬ 大人向け写真教室

フォトコンテストと連動する形で実施した。水族館での楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することはとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について当館職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらえたと考えている。

⑭ 開館 50 周年イベント

活魚輸送車一般公開：平成 28 年度に導入した活魚輸送車を展示した。また、時間を決めての解説や運転席に乗る体験を行なった。活魚輸送車の構造を紹介することで、生き物を生かして運ぶための工夫や重要性を水族館の役割ともに伝えることができた。

【特設パネル展「フンボルトペンギン飼育史」】

当館では 1977 年以来、40 年間フンボルトペンギンを飼育している。培った技術や知識を生かし、健康管理にも力をいれ、新潟水族館(旧館)生まれの個体が現在も 8 羽生存している。これらの個体を紹介しつつ、個体識別の方法や健康管理、繁殖への取り組みなどについてパネルを用いて解説した。展示しているフンボルトペンギンをより詳細に観察するきっかけとなったと思う。特に、個体識別に関して関心を持った方が多く、パネル観覧後に飼育個体を観察してタグを確認していることが多かったように思う。

【参加型イベント「フンボルトペンギン飼育の工夫」】

フンボルトペンギンの生態や形態についての理解を深めることを目的として、フンボルトペンギンの飼育個体数の変化、個体識別の方法や健康管理、繁殖への取り組みなどについてパネル、偽卵、タグ、羽などの物品を用いて解説した。また、資料と参加賞を兼ね、写真入りのカードを作成してもらった。生息地の気候や抱卵については誤った知識を持っている方も多く、正しい情報を知って頂くことができた。

【開館記念日　特別講演会】

新潟水族館が開館した日の 10 月 22 日に理事である西源二郎先生を講師にお招きして、第 1 部「日本の水族館　135 年のあゆみ」と題し、水族館の歴史について講演していただいた。詳細な調査に基づいた西先生の講演に対し、「日本と新潟の水族館の歴史について学べた、水族館に行きたくなった」などの意見が寄せられた。また、第 2 部「対談新潟水族館　History」と題し、新潟水族館(旧館)職員による講演会を実施し、対談形式で新潟水族館(旧館)について紹介した。写真を多く使用したこと、動画などにより、楽しみながら学んでもらえたと思う。

⑮ 水族館裏側探検「イルカ編」

毎年行っているイルカ解説プログラムで、平成 29 年度は飼育施設、骨格標本、生体等を見ながら飼育の裏側に重点を置いて解説を行った。昨年より多い、定員の 192%の応募があり、依然人気が高いことがわかった。平成 29 年度は平日にも実施して応募状況をみたが、対象者の設定を大人向けとしたり、メールでも応募可能といった工夫をしないと参加者が集まらないことが分かった。アンケートの結果を見ると、「よくわかった」、「時間の長さはちょうどよい」という答えが多く、こちらが意図した内容を概ね伝えられていて、参加者の満足度も高かったのではないかと思われた。

⑯ 成人の日記念特別企画「アメリカビーバー1/2 成人式」

飼育中のアメリカビーバーが 10 歳になることから、成人の日とボランティアの日がある 1 月に 1/2 成人式と題して実施した。来館者の展示生物についてのより深い理解と、ボランティアの館内イベントへの積極的参加を目的に、アクアラボ内に資料を展示し解説する形で行った。餌となるヤナギの採取と給餌、糞ペーパーと缶バッチ作り、体重比べ等、体験型プログラムも多く盛り込んだことで、参加者の満足度は高かった。

⑰ 講演会「知ってる？知らない？研究者が語るイルカの話」

水族館が鯨類の最新情報の発信場所となることを目的として、鯨類研究者による講演会を開催した。鯨類を調査研究されてきた中原史生教授(常磐大学)、鈴木美和准教授(日本大学)、中東明佳博士(前勇魚会会長)、一島啓人学芸員(福井県立恐竜博物館)の 4 名に講師を依頼した。

募集期間は短かったが、幅広い年齢層から多数の参加があり、鯨類に対する関心の高さが伺えた。

アンケート結果では、4 題とも「普段聞けない話が聞けて良かった・興味が持てた」などの高評価をいただいた。
今後も、このような講演会を継続し、水族館を通じて様々な情報を伝えることが必要であると感じた。

⑱ 大人向け講演会「水産資源を支えるプランクトン」
水族館や水生生物についてより深く知ってもらう事で、水環境について考えてもらうきっかけとし、大人に対しての教育の機会とすることを目的に実施した。国立研究開発法人水産研究・教育機構 日本海区水産研究所の研究者による「水産資源を支えるプランクトン」についての講演をおこなった。講演後のアンケートでも参加者の満足度は高かった。

（５） 企画イベントの実施状況について

［総括］

① 開館記念日オリジナルウェットティッシュプレゼント
開館 50 周年イベントに関連し、開館日である 10 月22日（日）に入館者全員にオリジナルウェットティッシュをプレゼントした。

② 年間パスポート販売キャンペーン
11 月 23 日（木・祝）～12 月 28 日（木）の間、年間パスポートを購入者へ館内ショップ・レストランで使用できる割引クーポン（大人 500 円分、小人 200 円分、幼児以下にはシール）をプレゼントした。クーポンの使用期限を1月 31 日までとし、期間中 2,383 人が購入し同期間で前年比 316.8%（752 人）と大きく上回った。

③ クリスマスツリー展示及び新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式
11 月 23 日（木・祝）から 12 月 28 日（木）の間、マリンピアホール（円柱水槽側）に高さ 4.5 メートルのクリスマスツリーを展示した。また、初日は地域連携の一環として新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式及びクリスマスミニライブを実施した。

④ 平成 30 年オリジナルカレンダープレゼント
毎年恒例のプレゼントとして、11 月 23 日（木・祝）から引換券を提示した先着 1,500 名へオリジナルカレンダーをプレゼントした。

⑤ クリスマスお菓子プレゼント
12 月 23 日（土・祝）から 25 日（月）の間、各日先着 100 組の中学生以下の入館者にお菓子をプレゼントした。

⑥ 正月オリジナルウェットティッシュプレゼント
1 月 2 日（火）・3（水）入館者全員にオリジナルウェットティッシュをプレゼントした。

⑦ 門松展示

1 月 2 日(火)から 7 日(日)の間、正面入口に門松を設置した。

⑥ 会員向け年間パスポート販売キャンペーン

年間パスポート会員へ情報誌を発送し、1 月 2 日(火)から 31 日(水)までに同封の案内文を持参した年間パスポートを更新した方へ館内ショップ・レストランで使用できる割引クーポン(大人 500 円分、小人 200 円分、幼児以下にはシール)をプレゼントした。

⑦ 新成人キャンペーン

1 月 8 日(日)～15 日(日)の間、成人式会場で配付したクーポン券チラシなどを提示した新成人及び同行者 1 名を無料入館とした。その他、オリジナルキーホールダープレゼントやクーポン券持参の年間パスポート購入者へ抽選でペア 5 名に館内レストランの食事券をプレゼントした。

⑧ バレンタイン企画「バレンタイン幸せくじ引きキャンペーン」

2 月 10 日(土)～12 日(月・祝)に入館し、ショップを利用した方を対象にショップでくじを引いてもらい、1 等から 3 等まで 3 日間合計 250 個のプレゼントを渡した。また、ショップ利用者全員にウェットティッシュをプレゼントした。

(6) 専門的な調査・研究等について

[総括]

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

日本動物園水族館協会の会議や研修会へ出席し、積極的な調査研究成果を発表すると共に、最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図っている。また、日本動物園水族館協会生物多様性委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。状況に応じて、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信している。

関東東北・北海道ブロック水族館飼育技術者研究会に参加し、「キタノアカヒレタビラの人工授精による繁殖」と「クロベンケイガニの飼育下繁殖～アカテガニとの種間比較～」について発表した。クロベンケイガニの国内初飼育下繁殖成功に対して、日本動物園水族館協会の平成 29 年度繁殖表彰を受けた。

東京大学大気海洋研究所で開催された共同利用研究集会「水族館の展示と研究。その相互作用を探る」において、当館で人工育成に成功したアカムツの研究から展示に至るまでの講演を行なった。また、自然科学雑誌「生物の科学遺伝」へ日本海の深海生物の採集、飼育技術について紹介する論文を執筆するなど、深海生物の調査・研究について高評価を受けた。

他の研究機関との水生生物に関する研究も積極的に行なった。水産庁栽培漁業総合推進委託事業の一環として、国立研究開発法人水産研究・教育機構日本海区水産研究所、富山県農林水産総合技術センター水産研究所とアカムツの種苗生産技術の開発に関する研究を行ない、アカムツの親魚養成技術の

開発を担当し成果を報告した。また、日本海区水産研究所とヤナギムシガレイの生態学的解明を目的とした共同研究「ヤナギムシガレイ当歳魚の底質選択制の解明」を実施した。

研究成果の公開も積極的に行なった。アカムツの継続育成により得られた繁殖生態に関する研究成果を稚魚とともに企画展示で紹介した。また、ふくしま海洋科学館と共同で、水中探査機による日本海深海域の調査を行ない、その成果を企画展示で解説パネルや動画を用いて紹介した。

生体入手の困難な種の飼育展示のための調査・研究でも成果を得た。全国で 2 例目となるハツメの展示を実現するなど、日本海を特徴づける魚類の展示種数を増やす努力をし、地域の自然の情報発信に努めた。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「夏休み親子魚探検隊 2017」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況も明らかにした。同主催の「新潟カメプロジェクト2017」では村上市、上越市、柏崎市、新潟市で実施された現地調査会に講師として参加し、新潟県産カメ類について生体展示や解説を行なった。

タランペクラブの「夏の陣 H29 親子で川遊び」に観察会講師として参加し、現地で確認された水生生物について解説した。

漂着等生物調査で得られたクサビフグ、アカナマダ、ヤリマンボウの剥製標本を製作し、昨年度に製作したリュウグウノツカイ剥製標本とともに通年展示した。調査により判明した生態に関する知見もあわせて紹介した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

（７） 総合学習等の受け入れ状況について

［総括］

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子供たちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めることを目的とした職場訪問といった目的の総合学習にも対応している。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や感想が寄せられている。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

（８） 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

［総括］

実習生等の受け入れとして、大学生および専門学校生を対象に「インターンシップ」「飼育実習・研修」「獣医実習」「博物館実習」を行った。これは、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、大学生・専門学校生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行っていきたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室（屋内）での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学

生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

毎年度継続して実施している新潟大学臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたい。小中学校への講師派遣は、小学校への職業講話が 1 校、中学校への職業講話が 2 校であった。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

（９） 市民ボランティアの活動の状況について

［総括］

ボランティア活動の目的を大きく「水族館（専門家）と来館者（非専門家）をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。平成 29 年度は 5 月に新規募集をおこなった。新たに 12 人のボランティアを迎え、総勢 88 人となった。活動状況は活動日数 180 日、活動延べ人数 502 人であった。

平成 29 年度の活動の柱として「館内案内」「いきもの教室の補助」「館内イベントの補助」「館内アンケート調査」「磯の体験水槽解説」「研修」を設定して実施した。特に「磯の体験水槽解説」は生き物ガイドとしての活動であることから、水槽担当職員による解説研修への参加と解説実技の試験を必須とした認定制にすることで解説水準を保つようにした。試験をするなど、一見ハードルが高い様に思えるが、ボランティアのモチベーション維持などにむしろ役立っていると思われる。

今後とも、水族館、来館者、ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

（１０） 広報および広告宣伝について

［総括］

平成 29 年度の広報および広告宣伝について、前半（4 月から 9 月くらいまで）は県外への広報、秋以降は県内への広報を重点的に行った。併せて 12 月に年間パスポートの周知を兼ねたキャンペーン CM を展開した。

① テレビ CM とラジオ CM

テレビ CM は、昨年度からの継続 CM にプラスして新規の CM を制作し放映した。12 月に年間パスポート新規購入者向けキャンペーン告知の CM を製作した。昨年同様、告知バーション効果があり、12 月の年パス購入者増に貢献した。ラジオ CM は、FM 新潟、FMポート、FM 山形、FM 福島、FM ぜんこうじ（長野市）で放送した。また、年間を通して毎月 2 回、夕方の FM にいがた「サウンドスプラッシュ」内で職員が生出演して旬な情報を提供した。

② 雑誌などの紙媒体への広告

雑誌などの紙媒体への広告は昨年度実績をベースにしつつ、効果的にリニューアルをアピールできる媒体を取捨選択して掲載した。

③ WEB

オウンドメディアを重視した展開を行った。当館ホームページ、Twitter、LINE@、Facebook などの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。また、1 月より Instagram の運用も開始した。

当館 Web サイトは前回のリニューアルより 4 年が経過することから、来年度(H30)の更新を目指し、事前の調査分析を行った。この調査分析を踏まえ、平成 30 年度中に新規リニューアルをする予定である。

④ 広報・プレスリリース

ここでは、プレスリリースの他、いわゆる「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」と位置づけることとする。平成 29 年度は報道機関の関心が高い「繁殖」「生物搬入」のニュースは少なかったものの、担当記者へメール等で直接アプローチする積極的なプレスリリースにより、実際に取材に結びつくものが多くあった。

（１１） 他園館との協力について

［総括］

のとじま臨海公園水族館、ふくしま海洋科学館、アクアマリンいなわしろカワセミ水族館、サケのふるさと千歳水族館、市立室蘭水族館、東海大学海洋科学博物館、鶴岡市立加茂水族館、秋田県立男鹿水族館、しながわ水族館(ブリーディングローン)、下田海中水族館から、魚類等の生物交換にご協力いただいた。

当館で飼育下繁殖したニホンイトヨを分散飼育として、世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふへ譲渡した。また、当館で飼育下繁殖したシナイモツゴとホトケドジョウを新潟県立自然科学館へ常設展示用に分譲し、企画展示用にニホンスッポンを貸し出した。

鶴岡市立加茂水族館へ保護されたキタゾウアザラシ漂着個体の採血、治療、治療方針のアドバイスのために獣医を派遣した。

姉妹友好館のふくしま海洋科学館をホスト館として平成 30 年に開催される「第 10 回世界水族館会議」の実行委員会メンバーとして参画している。

視察・研修として、魚津水族館 2 名、のとじま臨海公園水族館 2 名、登別マリンパークニクス 1 名、名古屋港水族館 1 名、秋田県立男鹿水族館 2 名を受け入れた。

市民ボランティア活動では、他園館視察としてボランティア 13 名が鶴岡市立加茂水族館を訪れ、バックヤード見学や先方ボランティアとの意見交換など有益な体験を得る事ができた。

（１２） 年間入館パスポートについて

［総括］

平成 29 年度の年間パスポートの購入者は、14,011 人（総入館者の 2.6%）、パスポート利用者（購入者＋リピーター）は 77,339 人（総入館者の 14.7%）となった。また、パスポート利用者の平均入館者数は 5.5 回であった。

購入者数は、過去最多であった昨年度の 11,097 人からさらに 2,914 人増加し 14,011 人となり、最多購入者数を更新した。また、入館者総数に占めるパスポート購入者、利用者の割合も年々増加傾向にある。昨年度に引き続き、館内外で積極的に広報したことや 11 月に条例の施行規則改正を行い、有効期限を購入日から 1 年間を最初に入館した日から 1 年間に改正したことで、家族や友人へのプレゼント用などとしての利便性が高まったことが増加に繋がったと考えられる。特に、購入者へ館内のレストラン・ショップで使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」を実施した際は期間中多くの方にご購入いただき、キャンペーンが来館のきっかけとなり、多くの市民にとって年間パスポートへの需要が潜在的にあることが改めて伺えた。今後も話題提供や特別展示などの情報提供を行い、年間パスポート会員が繰り返し来館していただくことが入館者増に繋がると考えられる。

アンケート調査での「生き物の展示」について 94.2%の人が「非常に満足」「満足」と回答しており、テーマや季節感に沿った特別展示などを行い、生物の変化を発見できたことが評価されたと考えている。他にも「子どもと月に一度は来ています。どんどん魚が好きになっていく子を見てうれしくなります。すばらしい施設です」「いつも子供と遊び、楽しませていただいています」「イルカショーの内容がいつも違っていてあきません。子供も楽しめる高さで展示してあり見やすいです。また来ます」などの声もいただいている。

また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては、「購入の予定なし」と答えた人が 0.1%で、91.7%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

（１３） 市・他団体等との協力

［総括］

平成 29 年度に行政や他団体等と協力して実施した事業は以下のとおりである。

水族館の集客力アップや安心・安全強化のため、他施設・他団体との協力が不可欠であり、指定管理者だけではなしえなかったサービスを展開できたと考えている。多くのお客様から楽しんでもらい、満足してもらえたと思う。

今後も、積極的に機会をとらえ、他団体や民間の持つ多様なチャンネルを活かした事業に組んでいきたいと考えている。

① 新潟市中央消防署との合同消防避難訓練

年 2 回実施している消防避難訓練のほかに、7 月 26 日（水）新潟市中央消防署との合同消防避難訓練を行った。水族館職員は通常の通報・避難誘導・初期消火訓練を行い、消防署職員はダミー人形を使った人命救助及びにいがたフィールドで一斉放水訓練を行った。初めての試みであったが、来館者を迅速に避難誘導し被害を最小限に防ぐため、消防機関との連携が不可欠であると認識させれる良い

機会であった。

② 日報トキっ子くらぶ夏休み自由研究に出店

8 月 5 日(土)・6 日(日)にメディアシップで開催されたイベントに出店し、節足動物の観察と題し顕微鏡観察や生体展示、標本展示に触れたり観察しながら分かりやすく解説した。また、2 日間で 520 組にうちわ、チラシ、情報誌、思い出写真募集チラシなどを配布した。

③ 味方地区ふるさと納涼まつり出張展示

7 月 29 日(土)味方地区で開催されたふるさと納涼まつりに出張展示し、水族館での生物収集活動の一部を紹介したり、活魚輸送車の展示解説を行った。

④ 新潟花火でうちわの配布

8 月 6 日(日)陸上競技場へ新潟花火を見学に来た市民にうちわ約 1,000 枚を配布した。

⑤ 南区凧フェスティバル、産業まつり「風と大地のめぐみ」出張展示

10 月 1 日(日)南区で開催された凧フェスティバル、産業まつり「風と大地のめぐみ」に出張展示を行った。ペーパーキャップ作成、折り紙切りでヒトデを作りバス内に飾り付け、海の生き物展示、オリジナルペーパークラフトや水のいきものかるた販売などを行った。

⑥ 新潟市中央卸売市場「市場まつり」に出店

10 月 15 日(日)に新潟市中央卸売市場で開催された「市場まつり」に出店し、活魚輸送車の展示解説と見学、ペーパーキャップの作成・配布、オリジナルペーパークラフト及び水のいきものかるた販売などを行った。

⑦ 竹尾卸団地 NOC プラザ「ママケアフェスティバル」に出店

7 月 30 日(日)竹尾卸団地 NOC プラザで開催された「ママケアフェスティバル」に出店し、バイカルアザラシの生後 3 日目模型の展示、顔出しパネル、ペーパーキャップの作成、ポスター展示を行った。

⑧ 新潟青陵大学　青空祭に出店

10 月 28 日(土)・29 日(日)地域連携の一環として新潟青陵大学の青空祭に出店し、バイカルアザラシの生後 3 日目模型の展示、顔出しパネル、等身大カリフォルニアアシカ、フンボルトペンギンの展示と解説、オリジナル缶バッチの販売、ショップの水族館グッズの販売、レストランによる軽食販売を行った。

⑨ 新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設共通割引券」の導入

新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設利用促進」の実施により、「市民割引券」に代わるものとして「文化・観光施設共通割引券」を導入した。新潟市だけでなく広域都市圏の方も割引で入館できることとした。

⑩ 新潟大学医歯学総合病院 小児病棟への出張プログラム

11 月 29 日(水)新潟大学医歯学総合病院小児病棟に出張展示を行った。ミズクラゲなどの展示、バイカルアザラシの生後 3 日目模型や顔出しパネルの展示、缶バッチ作成・パネル展示等を行った。

⑪ アルビレックス応援 T シャツ着用

9 月 30 日(土)からサッカーアルビレックス新潟のホームゲーム残り試合に応援 T シャツを着用し営業を行った。館内では、ショップ・レストラン店員が着用し、J1 残留を盛り上げた。

⑫ 子育て応援 Ustream 番組 nicotto 感謝祭に出店

12 月 23 日(土・祝)に天寿園で開催された nicotto 感謝祭に出店し、水族館オリジナル缶バッチを販売した。延べ 78 名が購入した。

⑬ NEXCO「新潟・北信濃・会津 週末フリーパス」利用者への入館料割引

ETC 車限定の新潟県内及び長野県北信濃地方・福島県会津地方のエリア内で、休日を少なくとも 1 日含む連続する 2 日間が高速道路乗り降り自由という内容で、申し込み画面を提示すると優待施設で割引のサービスが受けられるという企画に参加し、新潟の観光促進と入館促進が図られた。

⑭ 内閣府が実施する「子育て支援パスポート事業」への協賛

内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通展開する「子育て支援パスポート」事業に協賛し、当該事業の会員に対し割引を行い、新潟の観光促進と入館促進が図られた。

⑮ 天寿園へポスター展示

9 月 30(土)から 10 月 30 日(月)の間、天寿園で新潟市水族館 50 周年記念パネル展示、イベントポスター掲示を行った。

⑯ 南区バス車内水族館

7 月 23 日(日)から 8 月 18 日(金)の間、南区を走る路線バスで新潟市水族館がラッピングされたバス内で、車内水族館と題しいきもの図鑑として 25 種の写真解説、いきものラミネート約 50 枚、活魚輸送車の模型、パラパラ漫画の設置を行った。

3. 入館料収入の実績について

平成 29 年度入館料収入 456,239,052 円

[総括]

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

平成 29 年度の入館者数は 526,371 人、昨年度は 525,008 人とほぼ同水準であったにもかかわらず、入館料収入では 456,239,052 円で昨年度の 459,040,376 円と比較し 2,801,324 円、対前年度比 99.4%

と減少した。また、客単価も 866 円であり、昨年度の 874 円から 8 円下がった。年間パスポート購入者の増加に伴い、会員の入館者数が全体の入館者数に占める割合が増えたことや一般客、団体客の減少が影響したと考えられる。

収入増対策としてゴールデンウィークや学校の長期休業に合わせ、新潟市内の幼稚園・保育園、新潟市外県内、山形、福島、長野、群馬の小学校へ割引券付チラシ（提示で 1 組全員 2 割引）を配布した。また、11 月には冬場の閑散期対策として新潟市内の小学校、幼稚園・保育園に同様の割引券付チラシの配布などを行い、実施期間中、多くのお客様に来館していただき、一定の収入があり、観光客の来館動機付けに効果があったと考えられる。

新たな取り組みとして、内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通展開する「子育て支援パスポート事業」に協賛し、そのパスポート会員への割引を平成 30 年 3 月 1 日から導入した。開始から 1 ヶ月で 1,327 人のお客様にご来館いただき、新潟市内のお客様については今後、年間パスポートに移行されることが期待される。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」や、同じくリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで 2 割引となる「JAF カード割引」も継続して実施している。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施した。今後も来館する幼稚園・保育園、小学校、老人施設、福祉施設などが増え、質量ともに負担のかかる業務になることが予想されるが、団体休憩室の予約など状況を把握し不備のないよう行っていきたい。

4. 管理経費等の収支決算について

［総括］

必要な物品購入や委託、修繕工事等を十分に精査し経費削減に努めた。

平成 28 年 3 月の財団設立に伴い、事業開始 2 年まで消費税の納税義務が免除されたことで、予算措置されていた公租公課費（消費税等分）20,530,000 円のうち 14,800,000 円を返納し、平成 30 年 2 月に減額の変更協定を締結した。差額の 5,730,000 円は新潟市と交渉を行い、緊急性かつ 250 万円以内の工事を行った。特に、「雑用水用給水ユニット更新工事」は故障するとトイレなどの水がでなくなるなど、水族館の営業自体に関わることであったため大変意義のある工事であった。

海水取水設備においては、取水先端部海底面の上昇により取水口付近の着砂が進行し、取水口の埋没が懸念されたことから平成 27 年 8 月に取水先端部の 60cm 嵩上げ工事を行った。これにより、冬期の海水着水槽の植物片の流入が少なくなり、昨年度は人的排砂作業も含め除去作業を行なわず済み改善されたと思われたが、平成 29 年度は、冬期の荒天で海の荒れる日が続いたことから、再び砂と一緒に植物片の流入が発生した。1 回のみ大型吸引車を使って除去作業を行ったが、汚泥処理分費を含め約 1,500,000 円の経費を要した。しかし、長年の懸念事項であった取水管砂流入については、新潟市、施工業者、水族館と協議を重ねた結果、平成 30 年度に恒久対策としての取水管 200m延長工事を施工することになった。取水管砂流入対策工事の事業主体は新潟市であるが、水族館の生命線である海水取水設備であることから、水族館と施工業者が密に連絡を取り、協力しながら行う必要がある。これにより当面の懸念は回避されるが、毎年の保守点検等で今後も注視していかなければならない。

経費が嵩む工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所で不具合が依然として

発生しており、その都度修繕工事を行ってきた。逆に経費を抑えるため、光熱水費について夏場の最大電力を抑えるため設備の運転時間を間欠したり、空調の設定温度を変更するなど積極的に節約を行なった。また、原油価格の動向により電力会社が算出する「燃料費調整額」がマイナスに調整されたことで工事費をまかなうことが出来た。その他にも周辺道路・駐車場の警備員を実態に沿った人員配置を行なったり、特別展示の会場設営を出来るだけ自前で行うなど経費節減に努めた。

また、平成 27 年度末に導入した活魚輸送車については魚類搬入に際し計画的に活動を行った。魚類購入の際、業者に依頼することなく自前で多くの魚類を購入・運搬することが出来きたことから、経費削減に貢献することができた。

工事については、リニューアルから 5 年が経過し不具合による修繕工事費が嵩むことが予想されることから、平成 30 年度大規模修繕が発生した場合は、市と相談しながら行っていきたい。

今後も「最小コストで最適な管理」目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

5. 自己評価に関する事項について

6. 最後に

平成 29 年度の入館者数は、526,371 人（対前年度比 100.3%）、入館料収入は、456,239,052 円（対前年度比 99.4%）と、平成 28 年度とほぼ同水準であった。事業計画書で掲げた入館者数目標値 517,000 人は達成できたものの、入館料収入目標値 473,820,000 円には及ばなかった。条例規則の改正や「年パスキャンペーン」により年間パスポート購入者が増加したものの、団体や個人入館券での入館者が減少したことが原因と考えられる。リニューアルオープン後、年々減少することは一般的な傾向ではあるが、入館者数では、リニューアル後 5 年連続で 500,000 人を超えた。入館料収入では入館者数が 460,529 人であった平成 18 年度とほぼ同じ水準であった。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が 94.0%、イルカショー、解説プログラムで「非常に満足」と「満足」の計が 94.0%とリニューアルオープン 5 年目を迎えた平成 29 年度も満足度は高水準を保っている。

また、年間パスポート会員を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が 32.8%（前年度 37.7%）と昨年度よりわずかながら減った。年数が経つにつれ「はじめて」が減ることは当然であるが、県外からのお客様では「はじめて」が全体の 22.2%と昨年度と同様最も多く、県外においてはまだ来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。一方、新潟市内のお客様で多くは複数回来館されており、「はじめて」は年々減少している。特に来館回数 4 回以上は全体の 23.5%と比較的多く、「また来たい」と思えるような施設づくりを心がけたことがこのような結果に繋がったと思われる。今後も、いつも来ても新鮮味のある展示に努めることで年間パスポート購入者の増加に繋げ、さらにリピーターとして何度も足を運んでいただくことで入館者数増に繋げたいと考えている。

施設については、リニューアル工事の対象外であった箇所で突発的な不具合が依然として生じており、今後も十分考えられることから、工事未着手の箇所は注意深く維持管理すると共に、リニューアル工事を行なった箇所についても設計会社が提案した修繕計画に基づき新潟市と相談し、早めの対応で不具合による

事故が起こらないよう努めたい。

また、駐車場は、平成 28 年 3 月に水族館脇の土地を整備し、最も近い駐車場として 56 台増設した。お客様にとっては利便性が高く、繁忙期には当該駐車場への回転が良くなったことで、従来の駐車場不足や周辺の目立った渋滞も多少は改善されたのではないかと思われる。また、冬季は全国的に記録的な寒波・大雪となり、新潟市でも平年以上の降雪となり、駐車場やアプローチ棟までのお客様動線も相当な積雪となる日が多かった。開館時間に間に合わせるため職員が早めに出勤し、一丸となって除雪作業を行った結果、閉鎖や休館することなく通常どおり営業することができた。また、駐車場や正面ロータリーなど広範囲な場所については除雪業者に委託しなければならなかったが、到着時間が読めないこともあり、フォークリフトを使い、出来るだけ自前で除雪作業を行い開館時間までには作業を終えることができた。近年、海岸部においても降雪量が多いため、今後は除雪機を導入するなど短時間で効率的に除雪作業を行う必要がある。

水族館を運営する上で長年の懸案事項だった取水設備については、管理経費等の収支決算でも述べたが、平成 27 年度の応急対策としての取水口先端部 60cm 嵩上げ工事、その後の恒久対策に向けた事前調査・設計など経て、ようやく平成 30 年度に既存取水口から取水管 200m延長工事を行うこととなった。取水設備は水族館の生命線である海水を調達するための重要な設備であるため、今後も新潟市と協力しながら進めて行きたい。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムや磯のいきもの解説など体験型プログラムを充実させている。また、スポットで実施した「にいがたフィールドガイド」や、「育成室開放」や「水族館裏側探検（イルカ編）」、「フォトコンテスト受賞作品展」「大人向け講演会」など多くのイベントを実施した。

高病原性鳥インフルエンザ対策について、平成 29 年度は県内で疑われる事例が発生しなかったため前年度のように対策本部は設置しなかったが、念のため 11 月 1 日より職員駐車場入口に消石灰の散布（タイヤ消毒）を行った。今後もマニュアルに沿った対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優先に考え被害の防止に努めたい。

WAZA（世界動物園水族館協会）の指摘により、和歌山県太地町でのイルカ追い込み漁の残酷性からイルカ入手が困難となっている問題については、引き続き JAZA 及び飼育水族館と協議しながら様々な可能性を探っていきたい。

平成 26 年リニューアルオープンした鶴岡市立加茂水族館や北陸新幹線の開通、平成 27 年オープンした仙台うみの杜水族館、さらに平成 30 年度 6 月オープンが予定されている上越市立水族博物館など、近隣園館や県外への観光客の流失が考えられる中、新潟市水族館のさらなる魅力づくり目指し「水族館業務を行う専門家集団」として平成 2 年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、より多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。

財団運営については、新潟市開発公社から水族館部門が独立したことに伴い、新潟市海洋河川文化財団・新潟市開発公社共同事業体が指定管理者として初めて管理・運営を行なった。財団の本部機能を水族館内で行うこととなったが、大きなトラブルもなく業務を行うことができた。平成 29・30 年度の 2 年間は新潟市開発公社からの支援を受けながら水族館運営を行うが、法人としても自立でき、次期指定管理者選定では単独で指定を受けられるよう努めていきたい。